15日ごとの独白（モノローグ）

内田　鴻

15日ごとの独白（モノローグ）

内田　鴻

15日ごとの独白（モノローグ）

昭和53年8月20日　印　刷
昭和53年8月31日　発　行

著　者／　内　田　　鴻
大宮市風渡野301—6　TEL 0486 (83) 3565

印刷者／　望　月　　憲
印刷所／　株式会社　望月印刷所
大宮市桜木町4—444　TEL　0486(41)6651(代)

装丁・レイアウト／著　者

本書を
父の霊に
母に
姉に
二人の兄に
妻に
そして二人の子供たちに
捧げる

序　同時代への証言

畑　和

このたび、私が提唱して昭和四十八年八月に発刊した県庁内報「けんちょう」の編集を担当してくれていた前広報課課長補佐の内田　鴻君が、毎号書き続けて来られたコラム欄「清流」の中から、事務的に過ぎるものを除き約八十編を集録して「15日ごとの独白（モノローグ）」と題して、一冊の本にして出版するとのことで、私にその序文を求められた。

内田君は、彼が広報課に転ずる前まで、私の知事就任（昭和四十七年七月）の時から、ずっと私の側にいて文化関係の手助けをしてくれた関係で、よく知り合った仲であった。その当時から彼の文化的素養は相当なものとの評価だった。だからこそ広報課にかわるようになり、選ばれて、その得意な筆致で毎号「けんちょう」コラム欄を書き続けてくれたのである。

私は毎号のコラム欄をその都度興味深く読ませてもらっていたが、今度この序文を書くに当たって纒（まと）まったゲラ刷を、も一度読ませて頂いて、彼の該博な知識とその因って来る読書力には改めて一驚させられた次第である。そうした読書力によって得られた古今東西の先人達の名文句がその中に随所に引用されていて、私も教えられるところが多かったからである。

今度内田君が纒められたものは、昭和四十九年五月十五日号から本年四月一日号までの約四年間にわたるコラムであるが、この四年間は日本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にとっても又わが埼玉県にとっても大変な時期だった。オイルショックによる財政の悪化、それからの脱出への努力、高度成長から低成長への急激な転換の時として、正に激動の時代とも称すべき時期だった。彼はこうした時に次々と起こる事象に対して鋭い視線を向け、これに適切な論評を下している。

ところで、彼がこのコラムを一冊の本にすることを決意した動機はといえば、彼は一昨年（昭和五十一年）二月から六月まで思わぬ病を得て病床にふせり、二回目の手術では生死の境まで彷徨し、その時万一そのままあの世へ行っていたら、あとに何が残っただろうかと考えさせられたというのである。幸い九死に一生を得た現在、この男が生き且つ考えた証を残しておいてもよいと思うようになったので、これを一冊の本に纒めておこうということになったのだそうだ。

そういえば私にも彼の場合と似通った思い当たることがある。私は大病で死にはぐったことはないけれども年齢が年齢である。私が郷土埼玉で五百万県民に選ばれて知事としてこう考えこうやったということを後に残しておきたいと思って、〝ベテラン知事にはなりたくない〟〝畑やわらふだん着の発言〟の二冊を本にした。更にいずれ又、埼玉新聞連載の対談〝知事招待席〟を一冊にしたいと思っている。ただ私の場合は内田君のような文才はないけれども。

（埼玉県知事）

目次

序　同時代への証言　畑和　1

I　年年歳歳　7

なまずのご気嫌　8
87分署キャレラ刑事　10
オカルト時代　12
願いの糸　14
会議は踊る？　16
鬼警部アイアンサイド　18
二羽のカモメ　20
老人と死　22
不況とミニスカート　24
エンゼルの言葉　26
歴史上の人物　28
ふるさとへの挽歌　30
年年歳歳　32

II　一年という時間　35

グローバル時代　36
迎合学　38
不況の嵐　40

後姿の… 42
日本語 44
ベテラン考 46
公務員給与 48
選ばれた者 50
ストとサラリーマン 52
日常性の恐怖 54
内部告発 56
元始の太陽 58
評論家の時代 60
リリー・マルレーン（Ⅰ） 62
リリー・マルレーン（Ⅱ） 64
残暑と六価クロム 66
青いぶどう 68
現代の禄高 70
冷酷な話 72
豊かな時間 74
安楽死 76
カセットテープ誘拐事件 78
一年という時間 80

Ⅲ 冬の旅 83

片隅の花 84
職員参加 86
泳げタイヤキ君 88

三木のり平氏の随筆 90
生命の売買 92
帰って来たもの 94
汚職考 96
地震予知 98
冬の旅 100
サムサノ夏 102
英語を話す犬 104
週休二日制 106
悪魔の発明品 108
「北」指向 110
下戸の論理・上戸の論理 112

Ⅳ 碑銘 115

人口五〇〇万 116
受験シーズン 118
スモン訴訟 120
当用漢字 122
学歴社会 124
適材適所 126
鸚鵡返し 128
鸚鵡返しPARTⅡ 130
悩み多き日々 132
「陽はメコンに…」 134
浮動票 136

SF・二千×年 138
円卓の効用 140
真夏のファッション 142
碑銘 144
長雨記録 146
美しい老い 148
一〇〇 150
人事管理 152
大和路散策 154
自治と連帯 156
秩父夜祭り 158
安宅の教訓 160

V 未来への遺産 163

平和な新年 164
「黄金の日日」 166
雪の夜のメルヘン 168
総理の月給 170
未来への遺産 172
桃の節句祝日案 174
音痴の鶯 176

跋 県職員から見た世相史 長井五郎 179

あとがき 181

Ⅰ

年年歲歲

49. 5.15～49.12.15

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

なまずのご気嫌

去る五月九日、伊豆半島沖を震源に発生したマグニチュード8.6の地震は、その規模の割合には大きな被害をもたらし、あらためて地震の持つ恐ろしさをわれわれに知らせてくれた。直下型の地震だったためと、朝食時にぶつかったこともあって、予想以上の災害となったようだ。折からの激しい雨に、もともと軟弱だった地盤のせいもあって、一瞬にして家財と肉親を失い、文字どおりぼう然自失する被害者の姿を見るにつけても、まことに哀悼のことばもない。

地震は、天災のうちでも最たるものの一つであろうが、最近は寺田寅彦博士のことばを裏切って、忘れたころに来るどころか、忘れるヒマもなく襲ってくるようだ。

地震、特に日本におけるその頻度は、六十九年を周期にしている――といった学者の説が紹介され、日本人の心胆を寒からしめた。それによると、関東大地震から数えて六十九年目の一九八二年には大地震の可能性があ

り、しかもその確率は、プラス・マイナス十三年であるという。これからすると、すでに今年は、地震の発生圏内に入っているわけだ。

小松左京氏の小説「日本沈没」が売れに売れて、いまだにベストセラー上位に顔を出しているが、その背景には、地震への恐怖感があるのだろうと思う。

県では四十九年度から行政防災無線を整備し、五十年度までに県内に無線網を張りめぐらして、一朝有事に備える計画である。備えあれば憂いなしということばがあるが、せめて五十一年までは、地下のなまずのご気嫌を損ずることのないよう祈りたいものである。

（49・5・15）

87分署キャレラ刑事

数年前だったろうか、当時評判を呼んだアメリカTV映画に「87分署」というシリーズがあった。※ニューヨーク市警の活動状況を、架空の87分署所属の刑事の動きを追いながら描いた、エド・マクベインの原作を脚色したもので、なかなか面白かった。

この映画を見ていて感心させられたことがある。それは、刑事たちの電話応待のマナーが実にいいということ。電話のベルが鳴るとすかさず受話器を取り、「87分署キャレラ刑事」と、通話者の身分姓名を明らかにするのである。

以来、気をつけて外映の電話応待のシーンを見ているが、ギャング映画のボスなどを除き、一般の人たちは電話応待のマナーを身につけているようだ。そして、そこにはマナーだからやるといったものでない、自然な、身についたものの持つさわやかさすら感じられた。

県庁職員の電話応待のマナーが悪いという声を耳にす

る。

「〇〇課ですか?」といわれて、ブッキラ棒に

「ソウ」

などと返事をするところもあるし、ひどい例では用件のタライ回しもあるという。

電話は対話者の顔が見えないものだけに、応待者の人間性が、ある面では端的にあらわれるものである。県民からの電話は、かける側にとってみると、よくよくの事情があってのことだ。身に覚えのある向きは、即刻改めて欲しいと思う。

(49・6・1)

※原作では、ニューヨーク市警ではなく、架空の都市アイソラとしている。

オカルト時代

魔術、呪術、呪咀（じゅそ）、透視力、念力、超能力の世界を扱ったコリン・ウイルソンの「オカルト」という本が、いま静かに売れているそうだ。「オカルト」とはラテン語の「隠れたもの」が語源で「秘術」と訳す。かなり難解なこの本が、それにもかかわらず読まれる背景は何だろうか。

光化学スモッグの発生、冷夏暖冬といった異常気象、奇形魚の発生、地盤沈下といった現象がわれわれの周囲に見られ、それはそれなりの発生原因についての説が出されているが、それだけでは十分に納得し切れないものがあって、それが微妙に人間心理の上に投影され、オカルトへの関心が強まっているということなのでもあろうか。

今月二日、ローマ発のAPロイター電によれば、今年の秋ローマで開かれる国連世界食糧会議実行委は、同会議の予備討議資料を発表。その中で「一九八五年までに

世界人口の五分の一に当たる八億人が栄養失調に直面することになろう」というショッキングなことを述べ、食糧の需給バランスを調整するための全世界的な努力を呼びかけている。これは世界的な人口増加傾向と無縁ではあるまい。

爆発的な人口増、それに伴う食糧、水、エネルギー源の不足等、こうしたニュースは、われわれに何とはなしに終末観を抱かせずにはおかない。

世相不安の時に、オカルトへの関心が集まるというが、われわれは、こうした時代こそ冷静に事態をみつめ、人間に与えられた英知という能力を発揮して、その解明にこそ当たるべきであろう。

（49・6・15）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com